

【プロフィール】

仙台市出身。東京芸術大学附属音楽高等学校卒業、同大学入学3ヶ月後にアメリカ、サンフランシスコ音楽院に招待留学。在学中、コールマン室内楽コンクール第1位、タングルウッド音楽祭では最優秀ヴァイオリニストとしてシルバースタイン賞を受賞。卒業後、同音楽院、スタンフォード大学の講師となる。スタンフォード弦楽四重奏団、フィラデルフィア弦楽四重奏団のメンバーとして世界各地で公演。ソロ活動も続ける。パサディナ室内管弦楽団コンサートマスター、シラキウス交響楽団准コンサートマスター、バンクーバー交響楽団首席第2ヴァイオリン、東京交響楽団アシスタントコンサートマスター、読売日本交響楽団をはじめ数々のオーケストラのゲストコンサートマスターを経て、1998年に札幌交響楽団のコンサートマスターに就任し現在に至る。

【異変から診断まで】

2019年3月、ある学校の卒業式で国歌斉唱中、声がいつもより低いことに気がつく。

4月より、内科、耳鼻科(3ヶ所)、脳外科、口腔外科、整形外科等病院で検査を重ねる。ろれつが回りにくくなる。

8月頃から、ろれつが回らなくなることが続き、話をするのが難しくなってくる。

9月頃、病院で検査を重ねるも原因がわからない日が続く。

10月脳神経内科での受診を薦められる。北海道医療センターにて同月16日、検査を受け始める。

11月15日、今までの経過と検査結果から、筋萎縮性側索硬化症(ALS)と告知される。

きんいしゆくせいそくさくこうかしょう

【筋萎縮性側索硬化症(ALS)とは】

手足・のど・舌の筋肉や呼吸に必要な筋肉がだんだんやせて力がなくなっていく病気。筋肉そのものの病気ではなく、筋肉を動かし、かつ運動をつかさどる神経(運動ニューロン)だけが障害を受ける。その結果、脳から「手足を動かせ」という命令が伝わらなくなることにより、力が弱くなり、筋肉が痩せていく。その一方で、体の感覚、視力や聴力、内臓機能などはすべて保たれることが普通である。

(難病情報センターHPより引用 <http://www.nanbyou.or.jp/entry/52>)

診断を受けてからまだ数日です。“大平まゆみ”に

これから何ができるのか。何をすべきなのか。

僭越ながら、ゆっくりと考えるお時間をいただけましたら幸いです。

みなさまの応援が、これからの励みとなり、力になります。

少しの間、そっと、今まで同様に

あたたかい目で見守っていただけましたら幸いです。

本日は、お忙しい中お集まりいただき本当にありがとうございました。

アシスタント 奥田萌